

年表の読み方の傾向と その指導

新潟市立鳥屋野中学校教諭

藤井 昭 蔵

はじめに

歴史とは原因結果の整然たる連鎖として叙述されたものであり、歴史を理解するとは、描かれた歴史像の理解をとおして、自らの歴史像を再構成することであるといえる。そして再構成される歴史像は、歴史事象を時間的位置によって関連づけた、まとまりあるものでなければならない。このような歴史像の再構成には、年表は、重要な役割を果たすものといえよう。

ところで、中学生の歴史理解の弱点として、歴史の流れ、時代の推移、史実の相互関連など、歴史事象の年代的な理解が不じゅうぶんであると指摘されてから久しい。そこで、ここでは「中学生の年表の読み方の傾向」をさぐり、望ましい「年表指導」を追究したい。

I 研究の構想

1 研究の目的

年表使用の目的は多いが、この研究では、上記のように「歴史事象を年代的に理解させる」ことを主たる目的として、授業のねらいに応じた年表を自作し、使用することとおして、生徒の「年表の読み方」「歴史理解」がどのように変化するか考察し、後述のような「年表による指導」がよかったのかどうか検討するとともに、「年表使用上の留意点」をとらえようとするものである。

2 研究の仮説

- ア 意図的に年表による学習指導をした学級の成績は、そうでない学級よりも向上するであろう。
- イ 年表を活用することは、特に中下位群の生徒の学習成績を向上させるであろう。
- ウ 年表の活用によって、年表の読み方が高まるであろう。
- エ 年表の読み方（読む力）と学習成績とは、関係が深いであろう。

3 研究の方法

(1) 年表使用の指導について

2学年5学級のうち、特に2学級について、後述のような学習指導上の留意点を設け、意図的に指導した。他の学級は、別に実験的意図を設けず、普通授業を行なった。したがって、比較群法による実験研究ではない。

- ・ 授業研究をした2学級の意図的な指導期間は2学期全部でありその期間中に、後述のような年表を作成し、そのたびに全学級に配布し使用したが、使用方法是担当教師にまかせた。
- ・ 授業研究の2学級については、2学期中に4回公開授業をもち指導法を全校社会科部員5名で批評・検討しあつて研究を進

めた。

(2) 仮説を検討するための評価方法

- ア 授業研究をした実験群と普通授業の統制群の編成方法
 - ・ 2学年5学級（235名）から100名抽出。
 - ・ 男女各25名ずつ、50名の実験群と統制群を編成し、検討する。
 - ・ 教研式学年別知能テストと教研式1学期用学力診断テストにより、知能偏差値と学力偏差値がともに相接近している50組の「つい」をつくり、各群を〔表1〕のような等質なものにした。

〔表1〕 知能・学力偏差値による分布（人）

知能偏差値 \ 学力偏差値	40	45	50	55	60	65	70	計
	44	49	54	59	64	69	74	
40～50	3	5	5	2				15
51～60	1	2	4	6	6	3	1	23
61～70			1		2	5	4	12
計	4	7	10	8	8	8	5	50

イ 学期末に実施した諸調査

- ・ 「仮説ア、イ」のために、教研式2学期用学力診断テスト。
- ・ 「仮説ウ、エ」のために、〔表2〕のような年表による調査。
- ・ 「仮説ウ」のために、特に、面接した。

〔表 2〕 年表「信長と秀吉」

(織田氏)	1570 一向一揆おこり信長苦戦する。	⑮	1569 (2) 信長 宣教師の京都の居住をゆるす	⑳
	浅井・朝倉比叡山の延暦寺 信長に反抗する。	⑰		
	1571 (1) 信長 比叡山を焼きうちする	⑱		
	1573 信長 浅井・朝倉をほろぼし、室町幕府をたおす	㉑	○キリスト教がひろまってきた	㉒
	1574 (1) 信長 伊勢長嶋の一向一揆を焼き殺す	㉓		
(豊臣氏)	1575 信長 長篠で武田氏をやぶる (鉄砲隊が活躍した)	㉔		
	1577 信長 安土の城下町に自由に商いのできる法令をだす	㉕	1577 京都に南蛮寺 (教会) ができる	㉖
	1580 一向宗の本山、本願寺、信長に降伏、一向一揆完全に平定	㉗	1580 (2) 信長、安土に南蛮寺 (教会) をつくる土地を 与える	㉘
	1582 明智光秀 本能寺に信長をおそい殺す。秀吉、光秀をうつ 秀吉 山崎で検地をした	㉙	大村氏、長崎を教会領に寄附する	㉚
	1583 秀吉、近江の検地をした	㉛	1581 (2) 信長、宣教師にびようぶをおくる	㉜
(豊臣氏)	1584 秀吉、比叡山の再興をゆるす	㉝	1582 九州の大名、ローマに使いをおくる ○キリシタン大名多くなり活躍する	㉞
	1586 秀吉、太政大臣となる	㉟		
	1587 秀吉、九州に遠征し、島津氏降伏する	㊱	1587 (3) 秀吉、キリシタン禁止令をだす	㊲
	1589 諸国の刀狩を行ない、農民と武士を区別する	㊳	1590 京都の南蛮寺を焼き、宣教師を国外に追放す る	㊴

※ この年表による調査用紙はA、Bの2枚からなり、Aは「比叡山の焼き打ち」と「キリスト教保護政策」の記述文をのせ、信長のとったそれぞれの「やり方」に対する、生徒の「考え」を書かせた。そのあと、Bを配布し、上のような年表を見せながらAと同じ設問で書かせ、その「考え」の根拠となった史実を年表の中から選択させ、その「番号」を記入させた。また、最後に、秀吉の「対キリスト教政策」をあげ、同じ方法で書かせた。

II 年表指導の概要

1 使用した自作年表と使用の重点

「年表」は、形態、内容、作製形式などにより種類も多く、学習内容、利用者の目的、発達段階などによって、活用の方法や度合も異なってくるであろうが、次のような年表を自作し、学習指導に使用した。

- ・「ヨーロッパ人の海外進出」……ルネサンス、地理上の発見以後、17世紀初頭までを国別に示した構造図式年表。
- ・「鎖国関係年表」……鎖国への歩みを、関係する史実を記入させる形で作製した学習用問題別年表。
- ・「ヨーロッパ人の来航から鎖国まで」…… (ページ参照)
- ・「初期の幕府政治」……家康から綱吉までを政治、経済、対外政策で示し、人物を加えた時代別年表。
- ・「江戸時代のまとめ」……元禄以後、幕末までを中心とし、幕政を軸として、武士、農村、町人の変化を重点に、文化、外交を配した構造図式、時代別年表。
- ・「江戸時代の文化」……学問、文学、芸術の3部門に分類並記した人物年表に、各人の事業、作品と時代の推移を加えた部門別年表。

- ・「欧米近代諸国家の発展」…… (ページ参照)
- ・「イギリスの産業革命」……作業としての記入事項が、機械の発明関係を主とした18～19世紀にわたる問題別年表。
- ・「欧米のアジア進出と日本」…… (ページ参照)

2 学習指導上の努力点

- (1) 生徒の思考を、発展的・追求的に深めるように指導過程を構造化する。
これは、よい思考場面を設定する。教材提示の意図を明確にし、問題意識の提起と、その発展を促す。具体的な史実に直面させるようにする。生徒各自に、いろいろな異なった意見を述べさせるように配慮する、などである。
- (2) 指導過程における年表使用上の重点
ア 「誤った時間的距離の印象をもつ」ことのないように、可能な限り「等間隔年表」にし、人物を歴史の流れの中に位置づけるために、「人物年表」を多用した。
イ 生徒の手による作業化を考慮し、「歴史の流れの大筋を把握する力をもつ」こと、「歴史事象の相互について関連的に考える力をもつ」ことを指導の重点にした。
- (3) 学習過程で、教材に対応する基本的な考え方や見方の方法を身につけさせる。
ア 教材の形式の相違による見方、考え方
教材の表示形式の相違によって、生徒が、< >の中のようなことに注意して見たり考えたりするよう、学習方法の訓練をした。
・年表<時期、期間、変化、関連など> ・地図<位置、地名、広さ、距離、方位など> ・記述文<用語、因果、包摂、変化関連など> ・スライド、絵画<何か、感銘、特色、時代背景

との関連など>

イ、アをより確かなものにするために

- ・迅速に
- ・作業を
- ・確認を(となり同志で)

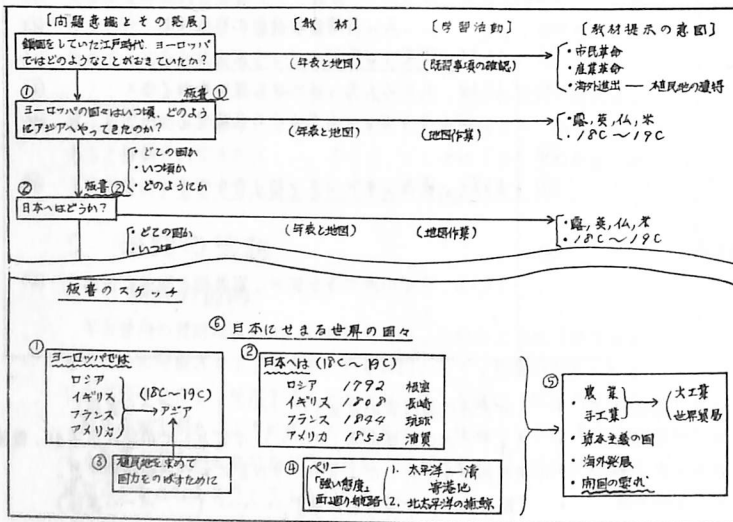
の3点を基本的習慣として、身につけさせるよう指導した。

3 授業のあらまし

(1) 指導計画

ここでは、通常いわれている学習計画や指導案は省略するが、実験授業の組み方として、内容の組み立て方、板書の形式や時期、発問や生徒に望む問題意識などの一端を知っていただくために、次に指導計画の一部をあげておく。

【表3】「日本にせまる世界の国々」



(2) 授業の記録 — 年表による指導 —

すべてについては述べられないので、年表による導入、展開、整理での授業例と、使用した自作年表の一部分とをあげておきたい。

ア 導入段階での指導例「日本にせまる世界の国々」

この年表は、「世界の動き」「日本との関係」作業用としての「外交政策」の3列と地図とからできていて、期間は17世紀〜19世紀地図上で着色による作業を中心に、英、仏、米、露のアジア進出の年代的、地理的理解から、わが国の開国への歩みを学習させようとしたものである。

- T₆ どの国がアジアへ出てきたの。
P₄ イギリス、フランス、ロシア、アメリカがアジアに進出した。
T₉ それは、いつ頃。
P₇ 18世紀。
T₁₀ もう少し説明すると……
P₈ 18世紀から19世紀にかけてです。【板書①】
T₁₁ そうするとね、日本の国と、今の18世紀から19世紀にアジアへ出てきた欧米の国々とは関係があるの、それともないの。
P 「ある」「ない」の声しきり
P₉ まだ、日本へはきていません。

- ・ 「いつ」という問い方をすると「〇〇年」と答える生徒が多く、「いつ頃」と聞いても、P₇ のように答えやすく、P₈ のように「幅のある答え」は出てきにくい。
- ・ T₆ の発問の前に7分30秒の作業時間を与えてあるのだがT₁₁ に対し、P₉ のような返事すらできてきたことは、年表にどの程度に、何を入れたらよいのか、作業させる時間の長さとともにむづかしいところである。P₉ は、地図だけしか見なかったのだろう。また、地図だけでは内容までは握できない。だから、次のT₁₂ のような助言によって、地図と年表は一つのものとして生きてくる。そして、T₁₃ はその確認として重要である。

T₁₂ 地図を見直せよ。年表の「日本との関係」もよく見るのだよ。

P₁₀ あると思います。あの、根室や浦賀に……アメリカやロシアが通商を求めてきた。

T₁₃ どうしてそういえるの。

P 「地図に出ている」「日本との関係」にも、そう書いてある」

T₁₅ では、日本との関係で整理しよう。【板書②】をしながら」

P₁₂ 日本へは、アメリカが1853年浦賀にきて、ロシアが1792年根室、イギリスが1808年に長崎……それだけだと思います。

P₁₃ フランスが琉球に1844年、通商を求めて……

(生徒の中に動揺が生ずる。「琉球は日本になっていたのか……」)

- ・ 年表に書かれている用語、表現の吟味は重要な意味をもつ。P₁₂ とP₁₃ を比較ねがいたい。P₁₂ は「コトバ」に左右されずに、関係ある史実を選択したのに反し、P₁₃ は「通商を求めて」だけにたより、「琉球」が捨て去られたものらしい。

「欧米のアジア進出と日本」

1850		1800		の戦い
58 日米通商条約 ○大政奉還・王政復古	53 ペリー浦賀にきて開国を強く要求する 54 ペリー再び来航・日米和親条約	44 フランス船琉球にきて通商を求める ○天保の改革はじまる	08 イギリス船フエートン号長崎をおそう 92 ロシア人ラツクスマン根室にきて通商を求める	
61 (ア) 南北戦争はじまる	53 (ア) ハワイを併合	42 (中) イギリスと南京条約(ホンコンをゆする) 40 (中) アヘン戦争	0 (イ) シンガポール占領 89 (フ) フランス革命	○イギリスに産業革命がおこる 75 (ア) 独立戦争はじまる
地図省略				

ウ 整理段階での指導例

「ヨーロッパ人の来航から鎖国まで」

1600+	'87キリスト教禁止 ()	明	ポルトガル	スペイン	秀家	秀忠	'88 刀狩	'88 無敵艦隊破る ()
'90+	'92 朝鮮出兵 朱印船 ()				吉	康	'93 太閤検地	
'97 朝鮮出兵								
1600	リーフデ号到来 (オ)-----			オランダ			'00 関が原の戦い	'00 東インド会社設立 ()
	'04朱印船 ()						'03 家康征夷大將軍になる	'02 東インド会社 ()
'10	'09 _____ に _____ 商館を開く			イギリス		家		'04 東インド会社 ()
	'13支倉常長ローマへ (〜) -----					光	'15 武家諸法度	
	イギリス船来る							
	'16外国船を _____ に制限							'16 後金 () おこる
'20	'19キリスト教徒を火刑にする							

授業記録は省略。この年表は空欄を埋め、史実と関係する人物と線で結び、將軍の在職期間を着色するなどの作業をさせた。

・能力の低い者もよろこんで作業する。・人物と関係国がその時代に位置づけられる。・年表を「縦」と「横」から読む訓練の場になる。・「ぬり絵」に終わらないように。

III 結果とその考察

1 学習結果の測定

結果の測定・評価のために、次の方法を用いた。

- (1) 12月中旬、教研式2学期用学力診断テストを実施。
- (2) 12月中旬に〔表2〕のような年表と質問紙による調査。
- (3) (2)の結果によって、その直後に各群から15名ずつ程度を選び面接し、仮説の検証とともに、質問紙の「自由記述」の傾向とその評価の妥当性を検討した。

2 測定結果とその考察

(1) 標準学力テストの結果の検討

〔表4〕 1学期に対する2学期の学力偏差値の変化 (人)

学力偏差値	49以下			50～64			65以上			計			
増減区分	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-	計
統制群	4	1	6	1	5	20	4	5	4	9	11	30	50
実験群	6	4	1	6	8	12	4	7	2	16	19	15	50

〔表4〕のプラスは学力偏差値が3以上向上した者であり、マイナスは学力偏差値が3以上低下した者を示し、0は1回目の偏差値を中心として、5以内の増減にとどまった者である。検定の経過は省くが、 $\chi^2 = 21.513$, $P < 0.01$ であるから、実験群は統制群より学力が高まったといえる。また、表のように上中下位群に分けて検討してみる時、中下位群に大きな差が見られる。

〔表5〕 技能素点による分布 (人)

学期別	一学期				二学期				
技能素点	0	5	9	13	0	6	11	16	計
	4	8	12	16	5	10	15	20	
統制群	8	12	16	14	5	15	16	14	50
実験群	4	22	10	14	2	12	19	17	50

〔表5〕は標準学力テストの内容の「技能(地図・年表の問題)」の素点によって分類したもので、実験授業開始前は統制群はより多く上位に分布していたが事後では、2群とも同じ分布になったといえる。これから、実験群の「技能」の進歩の度合は大きかったと考えてよからう。検定結果は、1学期が $\chi^2 = 12.838$, $P < 0.01$, 2学期が $\chi^2 = 5.002$, $P < 0.05$ である。

(2) 年表による調査結果の検討

ア 「年表の読み方」について

〔表2〕の年表による調査をまとめたものが〔表6〕である。Fは年表を読むどころではなく、目についた史実を、他との関連も考えずに、勝手に拾って記入した者であり、同じ「コトバ」（信長など）があったからというような理由で選択している。史実そのもの（年表の中の傍線のところ）を拾うよりまだ悪く、気まぐれ型ともいえよう。以下、Aは傍線のものだけ選んだ者、Bは直接因果の関係にあるもの

〔表6〕 年表の読み方による分布（人）

区 分	F	A	B	C	D	E	計
統 制 群	2	20	16	5	3	4	50
実 験 群	2	10	10	13	4	11	50

をも含ませた者、Cは時代の流れに位置づけて説明した者、DはCが年表を「縦」に読んだとするなら、「横」に読んだ者、EはC、Dの両面から読んだ者であって総合的な年表の読み方が身につけていると考えられる者である。故に、Fが「年表の読み方」としては最劣であり、Eが最もすぐれているといえる。統制群にはA・Bが、実験群ではC・Eが多く分布しており、分布の相違を検定すると、 $\chi^2 = 23.228$, $P < 0.01$ で明瞭に有意の差がある。

イ 面接について

ここでは、紙数の関係で事例をあげ得ない。そこで、筆者の判定による、結論的な点だけを述べておく。

- ・ 実験群の生徒に、選択された「考えの根拠となった年表の中の番号」数が多い。記述文の長さも、また長い。
- ・ 教科書の記述や学習によって覚えたことをあてはめて、年表に即して考えない傾向が、統制群にやや多く見られた。また、年表によって説明しようとはせず、調査問題の史実を、情緒的にのみ解釈している者も統制群に多い。
- ・ 「番号」数を多く書いた者には「でき」のよい者が多く、「その中ではどれが最も重要か」と問うと、正しく答えられる。このような生徒は、C、Eに比較的多い。
- ・ 逆に「番号」数の少ない者には二つの型がある。一つは成績優秀者であって、「他に関係するものはないか」と尋ねると、総合的に指摘する。それはEの一部であり、「関係あると思ったが一番重要だと思うものだけを書いた」という。他はA・Bに多くその他の関連する史実を指摘してやっても、彼等は自分のもっている「歴史像」を変化・拡大させず、多面的な解釈をなし得ない。
- ・ 「年表の読み方」としては、「横」に読むほうが、「縦」に読むよりも、生徒には、抵抗を感じさせるようである。年表指導にあたって、留意すべきことである。

ウ 「年表の読み方」と「学力」の相関

最後に表は省くが、F、A……Eを1、2……6点に点数換算し「年表の読み方」と学力偏差値との相関表をつくり、ピアソンの錯差積法によって検定を加えたところ、 $r = 0.673$ を得た。そこでこの両者には、相関があるといえることができる。

む す び

仮説ア、イは〔表4〕の結果により、ウは〔表4・5〕、エは上記の相関係数により検証されたといつてよい。したがって「年表使用の学習では、学習のねらいに応じた年表をくふう作成し、使用目的を明確にして、作業的に活用することが、すぐれた効果をあげることができる」と結論づけてよい。

最後に年表指導の留意点を、結論的にまとめておく。

(1) 年表の形態から

- ・ 使用目的によって形式・内容を決定し、できるだけ単純化して多目的なものにしないこと。複雑なものは、自作する意味がない。
- ・ 人物年表は、生徒の興味・関心の持続・知識の定着化にすぐれた効果をもつ。
- ・ 構造図式年表は、生徒のものになりにくい。その複雑さから、安易に使用すると混乱を招きやすい。
- ・ 「時間的距離」の表現にくふうをこらすことは、たいせつである。

(2) 指導上の問題点から

- ・ 年表に応じた視点・視角を適切に与えることは、「年表の読み方」を多面的・総合的なものに变化させる。
- ・ 何枚かの問題別・部門別年表を指導した後に、整理として時代別年表を使用することは、高い効果が期待できる。
- ・ 年表に書かれた史実の相互を埋めるための、また、意味づけるための教師の発問・助言には、くふう、創意、検討が強く要求される。
- ・ 「ぬり絵」にならないように配慮しながら作業化をすすめることは、能力の低い生徒を救うことができる。
- ・ 基本年表（ここでは教科書・折り込み年表）を指定して学習することは、自作年表による個々の学習を、全体として統一させるのに役立つ。

(3) 残された問題点

- ・ 年間指導計画の中に、年表指導をどのように位置づけるか。
- ・ 年表に書かれている「コトバ」は、どのようなものが適切か。
- ・ 教師自身の歴史理解にかかわるが、使用する年表との関連での発問、助言はどのようにあるべきか。